

破船

吉村昭著

新潮文庫

あらすじ と 読后感想



江戸時代、荒天の海で難儀する船を村人たちは、海岸で塩を焚きその炎を頼りに寄って来る船を磯に誘って破船させ、積み荷の米や水、衣料などを奪うことが実際に北の貧しい村では行われていたという。それらの記述をもとに小説にした吉村昭の作品。 貧しい村では口減らしで、娘や元気な男が口入れ屋の世話で身売りや年季奉公に出る。 主人公の父親も銀六十匁で三年奉公に行った。 幼いながらも伊作は母と一家を支える。 村長がまとめる十七戸の家はまるで山際にしがみついている様に見える。

病人が死を迎えるのは口減らしと言われる。死の迫った者には与える食べ物はなく水だけを飲ませる。 だが村には「霊帰り」の信仰があり、生命は神仏の授かりもので、一旦は海に流されるが時を経て女の体内に宿り、新しく赤ん坊として蘇ると信じられている。墓は海に向かって建ち、霊が戻って来るのを願うとの意がある。

待ちに待った「お船様」が現れた。

大喜びの村人には米をはじめ数々の品がもたらされた。 だが暫くして疫病に罹った人を海に流した船だったことが判明した。 恐ろしい疫病の天然痘に罹った者からの感染を防ぐ為に病人を海遠く船で流した記録も残っている。

そして村人にも伝染してしまう。罹患した伊作の母も山に行くことになった。

間もなく年季奉公から帰って来る愛する夫に、自分の変わり果てた姿を見せないで済むとでも思ったのか、家を出て行く母の笑顔は清々しくさえ見えた。



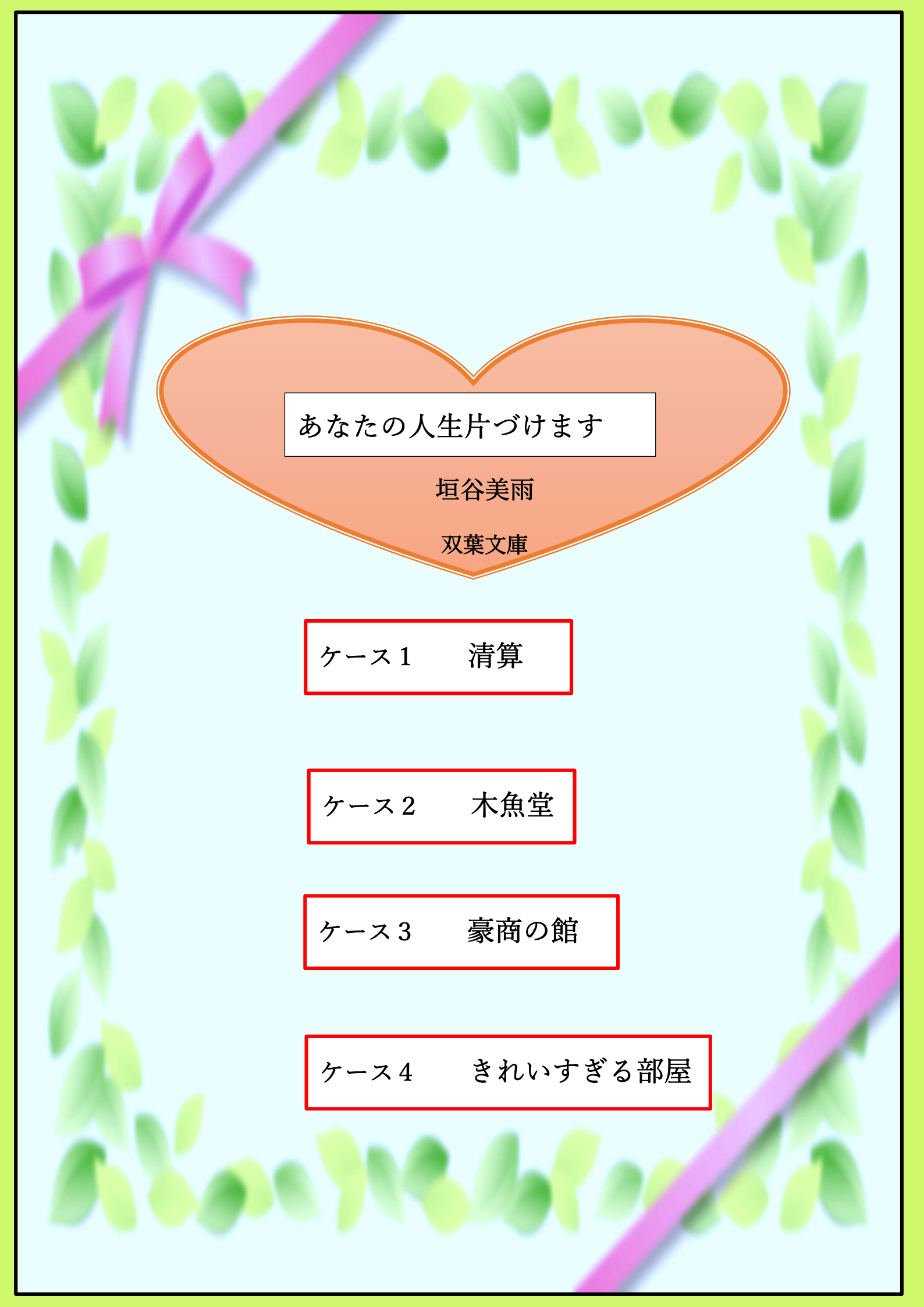
読后感想

- ◇ 閉鎖的で極貧の漁村に伝わる忌まわしい風習ではあるが、生きる為には仕方のない行為だったと思う。村人には罪悪感はなく「お船様」の到来は神の恵みと考えていた。
- ◇ 生きるか死ぬかの選択を迫られた時の人間の本質が現れる。
- ◇ 村に恵みをもたらす船の到来は、座礁した破船から村ぐるみで強奪する残酷な犯行行為に他ならない。
- ◇ 人間生存の本質である「食」を維持するため、統率者の村長の役目は、「飢えさせない事」。共同体であることを強く感じさせられた。
- ◇ 暗い切ない小説はあまり読まなくなったが、貧しい漁村で、家族が身を寄せ合って暮らす様子や村長（むらおさ）を中心に逆らう者もなく、まとまった村人達の行動。 貧しい村の人々の喜び悲しみが切なく描かれていた。
- ◇ ため息をつきながらも目を背けずにはいられない気持ちで一気に読み続けてしまった。そして実際に「お船様」の歴史があったことが何とも切ない思いにさせられた。
- ◇ 時代は変わり、今、日本も疫病のコロナに翻弄されてはいるが、この小説の様な食べ物のない悲惨さではない。この今現在の日本に生きていることの幸せを改めて感謝すべきだと思う。

ホームページ担当

北瀨園枝 太田加代子 小川裕子 嶋戸由美子

今年度は、4人で担当させていただきますので、どうぞよろしく願いいたします



あなたの人生片づけます

垣谷美雨

双葉文庫

ケース1 清算

ケース2 木魚堂

ケース3 豪商の館

ケース4 きれいすぎる部屋

あらすじ

片付け屋の大庭十萬里は、部屋を片付けたり物を捨てられない人たちの心の中の問題を探り、解決の手助けをする。その過程で原因を自ら気付かせることによって、部屋を片付けるだけでなく、心の中の問題をも解決整理して、これからの人生を見直して行く指導指針の指導をするという理想の片付け屋の物語。

問題を抱えた四つの家庭がそれぞれの方法で部屋も心もきれいに満たされて行く

読后感想

◎部屋を片付けられない人は性格もあると思うが何かしら心に悩みを抱えている人が多い。例えば、思い出深い物など記憶を纏っているものは捨て難い。その執着を整理すれば心も軽くなるのは分かっているのだ。何かのきっかけがあってそれを解決すれば、掃除も片付けもする気になるのだと登場人物の心が理解できた。

◎人間関係で、大事な人を失い、悲しみの底から立ち直れずにいる人にかける言葉は難しい。励ましの言葉は苦痛を与えてしまう事もある。辛いことを乗り越えれば人は強くなれるのだろうか？

◎四つの作品の底辺には娘を心配する両親、父親、娘、孫達の優しい暖かい愛情が溢れている。全てのケースがハッピーエンドで、すっきりと楽しく読めた。

◎断捨離ばやりの今風の小説で身近に感じながらも勉強にもなった。

